

死者を想うとき：宮沢賢治と高村光太郎の挽歌¹⁾

中里 まき子

まず、エリック・ブノワ教授のゼミナール「詩の経験 (L'expérience poétique)」において、日本の詩について講演する機会を与えていただいたことに心より御礼申し上げます。これから紹介する二人の詩人——宮沢賢治と高村光太郎——は、日本では大変よく知られていますし、彼らの作品はフランス語を含む多数の言語に翻訳されています。フランスではおそらく、太宰治、夏目漱石、三島由紀夫、村上春樹といった作家たちに比べれば、二人の詩人の知名度は低いことでしょう。それでも彼らの詩は、私たちの人生において文学がどのような意味を持ちえるかを開示してくれます。今日は特に二人が創作した挽歌——賢治の「永訣の朝」と「松の針」、そして光太郎の「レモン哀歌」——を取り上げて比較検討することにより、各詩人の魅力を浮き彫りにしていきたいと思います。

宮沢賢治による挽歌の創作

宮沢賢治 (1896 年～1933 年) は、妹のひとりであるトシに深い愛着を示していました。賢治より二歳年下のトシは、1922 年に二十四歳の若さでこの世を去ります。すると賢治は彼女を偲んで数多くの挽歌を創作します。そして、それらを収録した詩集『春と修羅』を 1924 年に出版します。賢治が生前に刊行した本は、この詩集と短篇集『注文の多い

1) 本稿は、2012 年 3 月にフランスのボルドー第 3 大学において行った講演 « Rencontre de deux poètes : Kenji MIYAZAWA et Kôtarô TAKAMURA » を和訳したものである。ただし、作家についての概説の大部分を省略した。作品や評論文の引用は、かなり長いものもあるが、原則として講演で紹介した通りに掲載した。

料理店』の二冊のみでした。いずれも自費出版です。そこから、賢治が、妹のために書いた挽歌を出版することに大変意欲的であったことが窺われます。賢治がトシを愛したのは、家族のうち唯一彼女だけが賢治を理解していたからです。

賢治と父親との関係は、葛藤を孕んだものでした。賢治は長男であったため、父、政次郎が営む古着商——高利貸しの機能を果たした——を継ぐ定めでしたが、彼はそれを望みませんでした。学問と文学への情熱が彼を家業から遠ざけます。それに彼は、この種の商売に嫌悪を抱いていました。地域の農民たちに共感し、心から同情していた賢治には、彼らを搾取することになる古着商を継ぐのは不可能でした。

加えて、彼の信仰もまた家庭での孤立を招きます。浄土真宗の信者であった両親の影響で、賢治は子供の頃から仏教に興味を示します。十三歳のとき、故郷の花巻を離れ、盛岡の中学校で学ぶために寄宿舎生活を始めた賢治は、盛岡の複数の寺を頻繁に訪れるようになります。十九歳のとき、そういった寺のひとつ、願教寺で島地大等の歎異抄法話を一週間聴きます。また、『漢和对照 妙法蓮華経』に深く感動していた賢治は、日蓮宗に帰依し、1920年、二十四歳のときに国柱会に入会します。賢治が日蓮宗への改宗要求を家族に向けるようになると、特に父親と激しく対立します。その上、賢治の信仰は彼を友人たちからも孤立させます。賢治は、盛岡高等農林学校時代からの友人、保阪嘉内に日蓮宗への帰依を勧める手紙を何通も送ります。執拗な勧誘の末、彼は青春時代をともに過ごした親友を失います。この孤立状態において賢治を支えた唯一の存在が、妹のトシだったのです。

ところが、1921年8月に彼女は病に倒れます。当時、東京に住んでいた賢治は、妹の病の報に接するとすぐに花巻に戻り、農業学校の教師の職に就きます。ほぼ毎日、授業を終えると、彼は結核に苦しむトシを寝室に見舞いました。そして、その死後に多数の挽歌を書きます。

では、その挽歌の一部を読むことにしましょう。まず、トシが亡くなった1922年11月27日の日付のある「永訣の朝」から始めます。

永訣の朝²⁾ (1922 年 11 月 27 日)

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつそう陰惨^{いんざん}な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青^{じゆんさい}い蓴菜^{とうわん}のもやうのついた

これらふたつのかけた陶^{たう}碗^{わん}に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛^{さうえん}いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

2)『宮沢賢治全集Ⅰ』, ちくま文庫, 1986 年, 156-159 頁。

雪と水とのまつしろな^{に そうけい}二相系をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまところからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

トシは、1922年11月27日の午後8時頃に亡くなりました。その日、賢治は朝から彼女の死を予感していたようです。おそらく医者がそのように告げたのでしょう。

詩の冒頭で、詩人は死の床にある妹に話しかけ、外は雪が降っていると言います。すると彼女は不意に、「あめゆじゆとてちてけんじや（あめゆきとってきてください）」と頼みます。この願いに応えるため、詩

人は、松の枝に積もった雪を集めに飛び出します。彼は、自ら妹に与える二腕の雪が、彼女の最後の食べ物であることを知っています。そして、最後の食べ物を自分の手で与えることに幸せを感じます。妹の最後の願いは彼の苦痛を和らげて、別離を受け入れることを可能にします（「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」）。

この詩は、形式上は兄と妹の対話の体をなしていますが、二人の応答は実際には噛み合っていません。つまり、二人が交わしたであろう会話を書き写したものではありません。妹に向けられた詩人の語りに、妹が発した言葉のうち彼の心に残っていたものが挿入されています。だからこそ、トシの言葉は彼女が発した通りに花巻弁で書かれているのに対し、詩人は標準語で語っていると考えられます。

次に、「永訣の朝」と同じ日付を付された二篇の詩のうち、「松の針」を読みます（残る一篇は「無声慟哭」）。

松の針³⁾ (1922年11月27日)

さつきのみぞれをとつてきた
あのきれいな松のえだだよ
おお おまへはまるでとびつくやうに
そのみどりの葉にあつい頬をあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは
どんなにわたくしたちをおどろかすことか
そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにねつに燃され
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるところでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた
《ああい い さつぱりした
まるで林のながさ来たよだ》

3) 『官沢賢治全集 I』, ちくま文庫, 1986年, 160-161頁。

鳥のやうに栗鼠^{りす}のやうに
おまへは林をしたつてゐた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ
おまへの頬の けれども
なんといふけふのうつくしさよ
わたくしは緑のかやのうへにも
この新鮮な松のえだをおかう
いまに雫もおちるだらうし
そら
さはやかな
ターペンティン
terpentine の匂もするだらう

「永訣の朝」において、詩人は松の枝に積もった雪を集めに行きましたが、ここでは松の枝そのものを妹に与えています。彼は、松の針に頬をこすりつけるトシを見て、彼女が林に行きたいと強く願っていたことに気づきます。彼女が病に苦しんでいる間に、青空の下で他の人のことを考えながら仕事をしたり散歩したりしていたことを、詩人は反省しています。それから彼は妹に、本当にひとりで行ってしまうのかと尋ねます。彼は、彼女が自分を呼んで、「いっしょに行けとたのんで」くれることを望んでいます。

続いて、これらの賢治の詩がどのような特徴と魅力を備えているかを、もうひとりの詩人、高村光太郎の作品と比較することによって明確にしたいと思います。

賢治に触発される光太郎

彫刻家であり詩人でもあった高村光太郎（1883年～1956年）は、すでに取り上げた二作品について印象的な評論を残しているので、まずは

それを読んでみましょう。賢治の死の五年後、1938年3月に雑誌『婦人之友』に発表した「宮沢賢治の詩」の冒頭で、「永訣の朝」と「松の針」を全文引用した後、光太郎は次のように記します。

こんなにまことの籠つた、うつくしい詩が又とあるだらうか。この詩を書きうつしてゐるうちに私は自然と淨らかな涙に洗はれる気がした。これは妹の死を書いた、岩手県花巻の宮沢賢治といふ日本に珍らしい立派な詩人の詩である。殆ど世に知られず彼自身も亦既に死んでしまった。

この詩の中の括弧の中の文句は妹の言葉をその花巻なまりのまま挟んだのであつて、「あめゆじゅとてちてけんじゃ」は「雨雪を取つて来てください」、「おらおらでしとりえぐも」は「私は私で独り行きます」、「うまれでくるたて云々」は「また人に生れてくるとしても今度はこんな自分の事ばかりで苦しめない様に生れてくる」の意味である。地方の生きた言葉が如何に美しく力強く、又比例正しく扱はれてゐるかを此の場合見ねばならぬ。さうしてこの地方の言葉が生きてゐると同程度に彼の詩語全部が生きてゐる。内面から湧き出してくる言葉以外に何の附加物もない。不足もないし、過剰もない。[中略]「松の針」の中で死に瀕する妹さんが兄の採つてきた松の枝に触れて喜ぶくだりの崇高の美は、「ああい い さっぱりしたまるで林のながさ来たよだ」といふ妹さんの素朴な言葉に到つて殆ど天井のものに類する⁴⁾。

宮沢賢治は死後も暫くは無名の存在でしたが、とりわけ二人の詩人——高村光太郎と草野心平——がその作品を発見し、世間に広く知らしめるべく尽力しました。

しかし、賢治と光太郎が実際に会ったのは一度だけ、1926年に賢治が東京千駄木の光太郎のアトリエを訪ねたときです。その日、光太郎は多忙であったため玄関先で挨拶を交わしたのみであったと言われてます⁵⁾。その後、二人の間に文通等の交流があったか否かを示すような資料は残されていません。ただ、1933年に賢治の死を草野心平に告げた

4) 高村光太郎「宮沢賢治の詩」[初出:『婦人之友』, 1938年], 天沢退二郎編『「春と修羅」研究Ⅰ』, 学芸書林, 1975年, 12-13頁。

5) この訪問の状況については、入沢康夫「賢治の光太郎訪問」『賢治研究』, 80, 宮沢賢治研究会, 1999年, 12-15頁を参照されたい。

のは光太郎でした。

光太郎は先ほどの評論において賢治の詩を賞賛していますが、彼は賢治に対し、一方ならぬ憧れと敬意を抱いていたようです。というのも、賢治は光太郎の詩の創作にも多大な影響を及ぼすからです。光太郎は、妻の智恵子が他界すると、賢治の「永訣の朝」と「松の針」をモデルとして「レモン哀歌」を書くことになります。

智恵子は光太郎にとって、自分を理解してくれる唯一の存在でした。彼女の死を予感した光太郎は、その死後には一体誰に自分の作品を見ればいいのかと途方に暮れていたほどです⁶⁾。光太郎にとっての智恵子はおそらく、賢治にとってのトシと同様の存在であったと考えられます。

それではここで、高村光太郎の「レモン哀歌」を読んでみましょう。

レモン哀歌⁷⁾ (1939年2月23日)

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりと噛んだ
トバアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに
智恵子はもとの智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時

6) 光太郎の死に際して草野心平が寄せた「悲しみは光と化す」において、智恵子の死の予感に怯える光太郎の言葉が記されている。「ね、僕は一体どうすればいいの？ 僕の仕事だって、智恵子が死んだら、誰一人見てくれるものがないじゃないの？」(高村光太郎『智恵子抄』、新潮文庫、1956年、168頁。)

7) 高村光太郎『智恵子抄』、94-95頁。

昔山嶺^{さんてん}でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機関はそれなり止まつた
写真の前に挿した桜の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置かう

「レモン哀歌」と賢治の二つの挽歌との間に、多数の共通点を指摘することができます。まず、いずれの詩人も死の床にある愛する人に「最後の食べ物」を——賢治は雨雪を、光太郎はレモンを——与えます。また、二人は、その食べ物が空（天）から来たものであることを強調します。違いと言え、智恵子がレモンを待っていたのに対し、トシが自ら雨雪を求めることでしょうか。

私は、もし光太郎が賢治の「永訣の朝」と「松の針」を読まなかったならば、はたして「レモン哀歌」を書いたかどうかと自問することがあります。またそれ以前に、賢治の挽歌に触発されずして、死に際の智恵子にレモンを与えることを考えついただろうか、と。私には、光太郎が、敬愛する詩人の挽歌を読み返しなが、来るべき妻の死に備えていたように思われてなりません。やがて光太郎は、智恵子との最後の別れに際して、賢治の身振り——最後の食べ物を与える——を繰り返すのです。

死者を想うとき

こうした符合性にもかかわらず、「レモン哀歌」と賢治の二つの挽歌とは、截然と異なった作品です。まず、光太郎の詩は実に見事に構成されています。彼は「レモン哀歌」を智恵子の死の四ヶ月後に書きました。それに対して賢治は、おそらくトシの死の直後に先ほど読んだ挽歌を書いたと思われます。第一、「永訣の朝」や「松の針」においてトシはまだ生きていて、彼女の死の瞬間は決して語られません。光太郎が、智恵子の死を、過去の出来事として距離を置いて眺めているのとは対照的です。

光太郎の挽歌が、賢治の挽歌よりも構成の面で優れているように思わ

れるとすれば、それはおそらく「レモン哀歌」が現実の場面を描いてはいないからです。複数の研究者が指摘するように、この作品は、現実の出来事に基づいて構築された、ある虚構の場面を提示しています。まず、光太郎は智恵子の「青く澄んだ眼」に触れていますが、彼女の眼が本当に青く澄んでいたとは考えにくいです。また、詩の末尾に「写真の前に挿した桜」とありますが、智恵子が亡くなった10月からこの詩が書かれた翌年2月までの間に、桜が咲いた時期はなかったはず⁸⁾。光太郎によるこの創作について、加藤繁生は次のように述べます。

要するに、「その瞬間」を描いたのではない。「その瞬間」を反芻し、成熟させ、ノンフィクションからフィクションへと転生させ、悲しみから脱却して創作へと向かう。[中略] 事実からは遠ざかってしまったが、むしろそれは光太郎にとって真実に近付いたことでもあった。[中略] そこにあるのは、妻の死の瞬間を記録しようとする夫の姿ではなく、人の死の瞬間を文学として描こうとする文学者としての姿である⁹⁾。

「レモン哀歌」の末尾で、智恵子の死が言及された後で詩人の現況が伝えられます。彼は、いつものように妻の遺影の前にレモンを供えと言っています。これは、すでに智恵子の死を受け入れた光太郎の姿であるように思われます。つまり彼は、数ヶ月に及ぶ喪の作業を経てから作品を創作したのです。そのときまで、智恵子の死をめぐる詩作を行うことはありませんでした。

それに対して賢治の挽歌については、まず、どのような状況下で創作されたかが判然とせず、謎に包まれています。「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」において、トシはまだ死んでいません。しかし、賢治がこの三

8) 上杉省和は「亡き智恵子への手向けの花として、虚構の桜が捧げられたのは、それが生前の智恵子の好きな花だったから」と推測している。また、賢治と光太郎の作品の相似性に着目しつつ、前者の「あめゆき」と後者の「レモン」との差異に、「二人の文学者の背後にある風土と生活様式の差異」が反映されていることを指摘しており興味深い。上杉省和『智恵子抄の光と影』、大修館書店、1999年、192頁。

9) 加藤繁生「二つの挽歌：「レモン哀歌」と「無声慟哭」」『詩人会議』、35(10)、1997年、65-66頁。賢治と光太郎の作品の対比的読解について、本論考から多大な示唆を受けた。

篇を、彼女が生きているうちに書いたと考えるのは難しいでしょう。また、この三篇には、トシが亡くなった1922年11月27日の日付が付されていますが、本当に賢治がこれらの挽歌を、死の当日に書き上げたと考えることも同様に難しく思われます。この謎をめぐるには現在までに複数の解釈が提示されています。草野心平は、上記三篇があくまでトシの永眠の日に、「少なくともその骨子は書かれた」と推測し、そこから、「賢治が詩鬼の鋭い爪につきさされていた」という見方を導きます¹⁰⁾。一方、加藤繁生は、賢治が11月29日に営まれたトシの葬儀に参加しなかったことに着目し、その葬儀の時間こそが三篇の挽歌を書くためのものであったと考えます¹¹⁾。いずれにせよ賢治の挽歌は、喪の作業のただ中にある若者が、心境を率直に綴った言葉なのです。

二人の詩人の出会い

最後に、宮沢賢治と高村光太郎との出会い、そして交流がどのような性質のものであったかを改めて考えてみます。光太郎は賢治の挽歌の影響のもとに「レモン哀歌」を創作しましたが、二人の詩人はまったく異なる創作上の美学を追求していました。光太郎が賢治に親近感を覚えたとすれば、それは第一に、賢治が最愛の人の死を経験していたからです。賢治の挽歌を読み返しながら、光太郎は来るべき智恵子の死を受け入れる準備をします。こうして彼は喪の作業を開始します。そこに至るまで、光太郎の賢治への敬愛心がどのように育まれたかを把握するために、二人の詩人の交流における重要な出来事を辿り直してみましょう。

1922年11月に妹トシが夭逝すると、賢治は複数の挽歌を創作し、それらを収録した詩集『春と修羅』を1924年に自費出版します。その後、1926年に賢治は光太郎を東京のアトリエに訪ねます。それは二人が実際に会った唯一の機会でしたが、挨拶のみで別れます。その日、光太郎

10) 草野心平「無声慟哭（その解説）」[初出：『無声慟哭・オホーツク挽歌』、新潮文庫、1953年]、天沢退二郎編「『春と修羅』研究Ⅰ」、128頁。

11) 加藤繁生、前掲論文、66頁。

はひじょうに多忙であったと言われています。この束の間の対面が何を意味するかを開示するような資料や証言は存在しませんが、私には、このときの光太郎は賢治に対して、まだそれほど強い愛着を持っていたようには思われてなりません。1926年の時点では、賢治は地方の小都市から出てきた無名の青年にすぎません。それに対し、高村光雲の息子であり賢治より年長の光太郎は、すでにある程度名声を築いていました。光太郎は、賢治の詩が自分にとってどのような意味を持つかを、評論「宮沢賢治の詩」を書くことになる1938年——智恵子の没年でもある——に向けて、徐々に理解していったのではないのでしょうか。

そのことを光太郎自身の言葉が裏付けています。賢治の死の翌年である1934年に、光太郎は次のように記します。

宮沢賢治の全貌がだんだんはつきり分つて来てみると、日本の文学家の中で、彼ほど濁逸語で謂ふ所の「詩人」といふ風格を多分に持った者は少いやうに思はれる。往年草野心平君の注意によつて彼の詩集「春と修羅」一卷を読み、その詩魂の歴大で親密で源泉的で、まつたく、わきめもふらぬ一宇宙的存在である事を知つて驚いたのであるが、彼の死後、いろいろの遺稿を目にし、又その日常の行蔵を耳にすると、その詩篇の由来する所が遙かに遠く深い事を痛感する¹²⁾。

この証言は、光太郎の賢治への崇敬が、この詩人の死後に、より一層深化したことを物語っています。

ところで、賢治が没した1933年は、前年にアダリン自殺を試みて未遂に終わった智恵子の病状が悪化する年でもあります。賢治の死を悼む光太郎が、賢治をフランスの画家セザンヌに比較しながら「コスモスの所持者」と称えた文章は、次のように締めくくられます。

私は今或る身の事情のためは以上書いてゐる時間がない。彼〔宮沢賢治〕について書けばきりの無い程書かねばならぬ。だが是だけで止めても結局は同じ事だ¹³⁾。

12) 高村光太郎「宮沢賢治に就いて」〔初出：『宮沢賢治全集』内容見本、原題「宮沢賢治全集刊行に際して」、1934年〕、〔高村光太郎全集第8巻〕、筑摩書房、1958年、229頁。

13) 高村光太郎「コスモスの所持者宮沢賢治」〔初出：草野心平編『宮沢賢治追悼』、1934年〕、〔高村光太郎全集第8巻〕、筑摩書房、1958年、228頁。

「或る身辺の事情」とはまさしく智恵子の病気を指すものと考えられます。賢治が没して光太郎が賢治への敬慕を募らせる数年間は、智恵子の病状が悪化する時期でもあったのです。

1938年3月に発表された評論文において、光太郎は「永訣の朝」と「松の針」を書き写しながら涙を流したと書いています。この涙はどこから来たのでしょうか。おそらく彼は、トシの死と重ねながら、目前に迫った智恵子の死を想っていたのです。賢治の挽歌に触発された光太郎は、同年10月に死の床にある妻に最後の食べ物であるレモンを差し出し、その四ヶ月後に「レモン哀歌」を創作します。

1926年の出会いのとき、光太郎は、やがて賢治とその詩とを崇拝するようになることを、おそらく知りませんでした。しかしだからといって、光太郎に先見の明がなかったということにはなりません。ある文学作品の価値は決して絶対的なものではなく、それは読み手の精神状態に応じて変わるものです。二人の詩人の交流は、文学と人生とが取り結ぶそうした関係を示唆していると考えられます。